

## 尾崎翠「こほろぎ嬢」論

—「少女共同体」と「分裂」

「キーワード ①尾崎翠 ②少女小説 ③分裂 ④分身」

## 0 はじめに

尾崎翠の「こほろぎ嬢」（「火の鳥」一九三二年七月）は、「第七官界彷徨」となれば代表作の一つであり、二〇〇六年の浜野佐知監督による映画化で、近年再び注目を浴びた作でもある。

作家論的には、次第に精神的なバランスを崩していく尾崎自身の孤独な姿が刻まれた暗いテクストとして捉えられることが多いが、テクストに登場する「りりあむ・しやあぶ」と「ふうおな・まくろおど」の「分心」というモチーフへの注目から、尾崎の「両性具有」志向や、肉体を介在する恋愛の否定を指摘するもの、あるいは後半に登場する「産婆学の暗記者」との分身性から、妊娠・出産の拒否を読みとるものなど、特にフェミニズムの観点から興味深い考察がなされている。さらに精神分析的なアプローチや、当時の社会・経済的状况との関連から主

## 竹田志保

体のゆらぎを指摘するもの<sup>注1</sup>など、アプローチは多様であるが、これらの研究に共通して見出される本テクストの特徴とは、「分裂」というキーワードに集約できるだろう。前述の「しやあぶ／まくろおど」という個人の精神内部での「分裂」（＝「分心」）をあらわした特徴的なエピソードだけでなく、「こほろぎ嬢」には、多くの「分裂」的な要素が指摘できる。そしてこの「分裂」というモチーフは、「こほろぎ嬢」に限らず尾崎翠という作家を考えるとときにも非常に重要なものとして、論じ続けられているものであるが、本論においては、この「分裂」を尾崎の作家としての出自である「少女小説」からの距離において捉えることで、改めてその方法的意義を考察したい。

以前、拙論<sup>注2</sup>において、吉屋信子と比較しながら、尾崎翠にも共通する「少女小説」というジャンルの持っていた拘束力を確認した。「少女小説」には、装飾的な文体と象徴的なモチーフによって、感性を共有する少女読者たちの共同体があり、その

なかから「少女」というアイデンティティは学びとられていった。特に、友情で結ばれた少女同士の「別れ」という結末に代表されるような「感傷性」の強さは、彼女たちが「少女」という期間を限定された存在であることに起因する悲しみでありながらも、現実的な解決からは隔てられざるをえずに、過剰さを増していく一方であった。そこで少女たちの自意識は、次第に商品化された少女のイメージの獲得の方に逸らされていき、美しい夢や理想に慰撫されて、自らの置かれている「少女」という特殊な抑圧状況は見えにくくものにされてしまっていたのである。

尾崎翠は、「少女小説」の作家としてスタートし、多くの「少女小説」を手がけながらも、大正後期頃からはそこからの転換をはかっていた。尾崎の作が、ユーモアやナンセンスの傾向を持って大きく飛躍する背景には、さまざまな要因が考えられるが、これを「少女小説」からの脱却として捉えたとき、そこで選ばれた「分裂」という方法が、「少女小説」というジャンル自体の拘束と、「少女」というアイデンティティのもつ困難の双方について、その閉塞状況を克服するものとして誕生したということができないのではないだろうか。

## 1 「こほろぎ嬢」と「私たち」

この小説は、こほろぎ嬢と呼ばれる女性をめぐる展開されていく。「借部屋」の二階に住むこほろぎ嬢は、ある詩人についての情報を探して図書館に通っている。その詩人とは「あり

あむ・しやあぶ」という男性詩人であるが、彼の「分心」である「ふいおな・まкруおど」という女性詩人と恋愛をしているという。そしてこの「しやあぶ／まкруおど」の物語とこほろぎ嬢の物語とが相互往還的に語られていくのである。

この小説において特徴的なのは、「私たち」という独特の語り手である。この「私たち」が何者であるのかは定かではない。それらは実体的な存在ではなく、こほろぎ嬢を取り巻き、彼女をめぐる物語を紡いでいくものである。また、「私たち」はこほろぎ嬢についての「全能の語り手」ではない。「私たち」は主に「風のためり」によってこほろぎ嬢を説明するが、そうした噂についての当否を決定しようともしない。

この理屈好きな風の見解は、私たちに半分だけ解つたやうな感じを与へた。解らない部分は、私たちも、やはり、神々の国の、霧のなかに預けておくことにしよう。そして私たちは、臆ろげながら思つたことである。このものがたりの女主人は、たぶん、よほどの人間ざらひなのであらう。それならば、私たちは、よほど心して彼女を扱はなければならぬ。彼女の影を見失はないやうに、私たちは静かに蹤いて行きたいのである。

「私たち」は確定的な何かを求めてはいないようであるが、しかしそれでも「私たち」には一定の価値基準がある。例えば、「私たち」はこほろぎ嬢には努めて同情的ではあるが、こほろぎ嬢の常用する粉葉についてはやや批判的である。

…この噂をはじめて耳にしたとき、私たちは、つくづくと

溜息を一つ吐いて、そして呟いたことであつた。この粉菓は、どう考へても悪魔の発明した品にちがひない。人の世に生れて人の世を軽蔑したり煙たがるとは、何といふ冒瀆、何といふ僭上の沙汰であらう。彼等常用者どもがいつまでも悪魔の発明品をよさないならば、いまに地球のまんなかから大きい鞭が生えて、彼等の心臓を引っぱたくにちがひない。何はともあれ、私たちは、せめてこのものがたりの女主人ひとりだけでも、この粉菓の溺愛から救ひださなければならぬ。(中略)

さて私たちは、途上の噂ばなしなどを意味もなく並べて、よほど時間を取つてしまった。けれど人々はそれ等の話によつて私たちのものがたりの女主人を、一人の背徳の女と決めてしまはれなくても好いであらう。：

近藤裕子は「匂いとしてのへわたし」―尾崎翠の述語的世界―において、この「私たち」という語り手に注目している。

冒頭、さまざまな風の便りを聴きつけ引用する「私たち」は、引用の分だけ「こほろぎ嬢」の印象を拡散させる。けれども、だからと言って、その後の「こほろぎ嬢」の物語が、複数の方向へ飛び散つてゆくというわけではない。

「私たち」という語り手は、「たち」という複数性をあらゆる接尾語を抱えてはいるが、囲い込んである複数の「私」の間に混乱や葛藤は見られない。ゆるやかなまとまりのうちにはひとつの物語を紡ぎあげてゆく語り手の主体（「私たち」）は、単一の中心をもつた複数の主体というより、複

数の中心をもつたひとつの主体というほうがふさわしい。<sup>注5</sup>

近藤は、「こほろぎ嬢」に「自己溶解」を読み取り、その語りの構造を「私たち」に含まれる複数の語り手（物語を統合する中心）「私」a、「私」nは、「それぞれ別個の物語a（物語nを担いながらも、「私たち」というゆるやかなまとまりをもつたメタレベルの語り手に再統合されて）いくと捉えている。語り手は、こほろぎ嬢と融合し、こほろぎ嬢もまた語り手に同一化するという。

しかしこの「私たち」という語り手が「複数の「私」の間に混乱や葛藤」がなく、「ゆるやかなまとまりのうちにはひとつの物語を紡ぎあげてゆく」のだとすれば、語り手が「脱中心化」を担う存在であるとは言ひ難いのではないか。問題は、語り手が差異を持たない集合体であり、そこに出所も真偽も不明で、なおかつ散漫な「風のたより」や「風説」が舞い込んでいるということにある。

ここで改めて「私たち」の性格を確認すれば、「私たち」とは、こほろぎ嬢を「私たちのものがたりの女主人」と呼び、こほろぎ嬢を追いかけて、もたらされるいくつかの情報を頼りにその像を形づくり、その都度、彼女についての感想を表明していく存在である。「私たち」のこうした営みは、語り手というよりも、仮想的な読者のそれに極めて近いと言える。<sup>注4</sup>つまり、この「私たち」とは、かつての「少女小説」の読者のような「共通の共同体」として捉えることができるのではないだろうか。

前掲拙論では、「少女小説」の特徴として、そこに登場する

理想的な「少女」モデルに対する、読者たちの共感や憧れ、ひいては同一化の構図があることを指摘した。また、そうした読者たちの共感のための重要な要素として「感傷性」があった。「少女小説」においては、登場する「少女」たちの不遇な状況が「あはれ」と嘆かれ、読者たちはその「悲しみ」への共感によって結びついていく。この構図はこほろぎ嬢と「私たち」の關係に非常に似ているのである。

…五月の原つばは一面の糠雨。季節に疲れた桐の匂ひ。そしてこほろぎ嬢の色あせた春の外套は、借部屋を出て二分あまり、すでにいちめん湿つぽかつた。人間の後姿といふものは、時に、見るものの心を湿つぽくするものらしい。いま、五月の原つばの情景に、私たちはしげんと吐息を一つ洩らしてしまつたのである。こほろぎ嬢の風姿は、それはあまり春の光景にふさわしいものではなかつた。嬢の後姿を包んでゐるものは、一枚の春の外套であるとはいへ、もはや色あせて、秋の外套の呼名にふさはしい色あひであつた。そして私たちは、こほろぎ嬢の風姿をいつそ秋風の中に置きたいと思つたことである。…

草臥れた桐の花の匂いに取り巻かれた「こほろぎ嬢の風姿」に共振して、「私たち」もまた吐息を洩らす。「私たち」はそこにこほろぎ嬢の淋しさを読み取り、自らも淋しさに共感する。しかし同時にこうしてこほろぎ嬢を積極的に「淋しい」と位置づけていくのは「私たち」なのであり、そこにはこほろぎ嬢自身の声は不在である。むしろ「私たち」の結びつきのために

「淋しさ」が必要とされているのであり、「私たち」はその代表を必要としているのではないか。「私たち」とは、こほろぎ嬢に「淋しさ」の物語を読もうとする存在であり、こほろぎ嬢は「私たち」の物語の中心に迎えられんとする「女主人」なのである。

しかしここで注目されるのは、こほろぎ嬢自身は、自らを取り巻く桐の花の匂いに對し、「鼻息の運動」によってそれを拒んでいるということである。「私たち」は、こほろぎ嬢のこの行為について、「私たちの知るかぎり、桐の花といふものは昔から折々情感派などの詩人のペンにも止つたほどの花で、その芳香を拒んだりするのは、よほど罰あたりな態度と思ふ」としつつ、幸田当八の学説によってこれを説明している。

——人間が薬品の副作用とか心の重荷などによつてひとたび脳神経の秩序をこわしてしまふと、彼は夏の太陽のごとき強烈なものから頻りに逃避しようとする。同時に彼は凋落に花の芳香のごとき繊弱なものをも拒むやうになる。(中略) また晩春の桐の花の下などを通らなければならぬときは、彼はしきりに鼻孔を鳴らし、性急な鼻息を以つて神経病に罹つてゐる桐の芳香を体内に入れないやうにするであらう。これを要するに、神経病者は神経病者を拒否するものである。これは同族者への哀感を未然に防ぐためであつて、彼と桐の花とは、たとひ人物と植物との差ありとはいへ、ひとしく神経病に侵されてゐる廉をもつて同族者である云云。

こほろぎ嬢が草臥れ、桐の花の匂いも草臥れ、「私たち」もまたその「哀感」を感じたとしても、こほろぎ嬢はそれら「同族者」との共感関係を拒んでいるということは重要である。しかも桐の花に象徴されるセンチメンタリズムを台無しにするような「鼻息の運動」という滑稽な行為によって拒否するのである。こほろぎ嬢を「秋風」のなかに置こうとする「私たち」に対して、こほろぎ嬢はあくまで歩み寄ることはない。それは、こほろぎ嬢が「ひとつのまとまり」に回収することができないような、「分裂」を抱えた存在であるからではないだろうか。

また、ここで語り手にもたらされる多くの「風説」、特に幸田当八のはたらきにも注目したい。幸田当八とは「分裂心理病院」の一医員である人物とされている。彼の学説は二カ所で参照され、しかもどちらもある事項についての科学的な根拠として持ち出されているのだが、その説明はあまりに非科学的であり、ましてやこほろぎ嬢のいる場と、りあむ・しやあぶのいる場の双方で参照されるという不可解さによって、より胡散臭いものとなっている。

ここで当八やさまざまな「風説」が担っている重要な機能とは、「共同体」の攪乱にあるといえるのではないか。たとえば当八は、「私たち」の他に、もうひとつの複数形の一人称で登場する「余等」のためにも呼び出されている。この「余等」とは、りあむ・しやあぶの友人たちのことであるが、彼らもまた語り手の「私たち」と同じく、個性性は不明瞭な、しかしある一定の解釈を共有する集団である。「余等」はしやあぶやま

くろおどの詩境を「雲や霧」のようなものとして評価しない。さらに、しやあぶがまくろおどを隠していると疑い、幸田当八の「腰の太い女が煙のやうな詩を書く」という学説を根拠に、まくろおどの「肉体」に期待する。しかしこの当八の学説は「余等」を裏切り、まくろおどは「肉体のない女詩人」であった。当八は、ある情報についての判断基準、「正しさ」の根拠を提供するものとして登場しつつも、ひどくいがわしい存在としてあり、その情報を補強しつつも同時にそれを無効にしてしまうような機能を担っているのである。

幸田当八の奇妙な学説を、語り手たちはたやすく信用し、参照する。しかし一方で「私たち」は非常に俗物的な存在として語られる。「余等」と同じく幸田当八を根拠にしまうことで矛盾を生じさせもする。しやあぶの擁護のために、「どつべるげんげる」など難かしい呼名のもとにしやあぶの魂をあばく心理医者は「えろすとみゆうずの神の領土に、まいなすのみを加へる者ども」であると位置づけ、分裂心理学者である幸田当八を批判しもある。さらに「私たち」はこほろぎ嬢の恋を擁護しつつも、「心理医者」と並べて「東洋の屋根裏部屋に済む一人の儂い女詩人」もまた「冒瀆人種」と位置づけたりするのである。

雑多な「風のたより」によって、こほろぎ嬢の物語を「汚し」てしまうことで、「共感の共同体」たる「私たち」が共有する価値観はゆらぎ、「私たち」の語りは混乱していく。「私たち」はこほろぎ嬢を肯定しようとしながら、同時にこほろぎ嬢

を批判してしまうのである。こうして「共同体」の価値観が攪乱されることは、彼らの結びつき自体を危うくさせてしまうような効果すらもつだらう。

「こほろぎ嬢」のテクストには、意識的にいくつかの「共同体」の存在があらわされつつも、同時にその求心性を裏切る要素が混入されているのである。

そして一方で、この「まとまり」に回収することのできないこほろぎ嬢が内的に抱えている矛盾や葛藤をあらわしているのが「分心（分身）」のモチーフである。

## 2 分心、分身

尾崎翠がどのようにしてウイリアム・シャープを発見したかについては、森澤夕子が詳細に論じている。<sup>注5</sup> 森澤は、尾崎の「松林」が掲載されていた一九二〇年二月号の「新潮」の、木村毅「個人内に於ける両性の争闘」において、尾崎はシャープの存在を知った可能性が高いと指摘している。ここで木村は「一男子の胸の中に女性の心と男性の心とが相對立して争闘した例で、殊にそれがイギリスの文壇でも著名な文學者に起こった事であり、最近心理學的にも、文學的にも珍奇な研究題目として、討議されて居るものであるだけに、吾々の興味を惹く事も随つて多いと思ふ」として紹介を始めている。

「こほろぎ嬢」中にもあるように、ウイリアム・シャープとは批評や詩を手がけた作家であり、一九世紀末に活動したイギリス在住のスコットランド人であった。フィオナ・マクロード

とは、その彼が死の十年前ほど前の間に使用した女性名のペンネームであり、その名で発表される小説や詩は、ケルト文化をモチーフにしていたという。そして実際に、彼の死までウイリアム・シャープとフィオナ・マクロードが同一人物であることは知られていなかった。<sup>注6</sup> 木村による紹介記事においては、当時の研究を参照して、以下のようにいくつかの推察が述べられている。

(一) ウイリアム・シャープとファイオナ・マクロードとは二重人格であつたか。

(二) マクロードはシャープに再化現<sup>レインカーニバル</sup>したる過去の婦人の自我であつたか。

(三) シャープは、人間界以外に存在する幻影的婦人に時折襲はれたり、取り憑かれたり居たのであるか。<sup>注7</sup>

木村はここで「文明の犠牲となつて生まれた畸形的天才の、痛ましい魂の呻きに或る同情を寄せざるを得ない」と述べ、両者の間に交わされた手紙についてもあくまで「分裂し、対立し、争闘し、征服し合ふ内部の苦闘を鎮撫し、調停しようとする努力」とされている。

しかし「こほろぎ嬢」においては、これが恋愛とされているのが特徴である。その間で交わされたという艶書が、「私たちの国のならいにしたがえば」として、『伊勢物語』の男性同士の贈答歌によって置き換えて提示されているのは、この恋愛関係が男性の自己愛の変形であるということを示すもののようにも思えるが、このような独特の「分心」という捉え方はどのよ

うに位置づけられるのだろうか。

当時、日本において「分身」をモチーフとした小説は多く描かれているが、そこには西欧のロマン主義文学や、映画、精神分析の影響が指摘されている。尾崎のエッセイにも、「分身」を描いて大きな話題となった「プラーグの大学生」への言及があり、こうした時代の雰囲気は尾崎の創作に影響を与えたことは確かである。

鈴木貞美は一九二〇年代頃からの「分身小説」の流行について、オットー・ランクの「死の回避のための不死の分身形成」という説や、クレマン・ロセの「自己の存在証明としての分身」という説を参照しつつ、しかしどちらも日本の「分身小説」をよく説明し得るものではないとしている。<sup>注8</sup>

ランクもロセも、「自己」というものになつたる危機の意識から「分身」が形成されると考える点では共通しており、それは日本においてもある程度あてはまる。機械文明や都市大衆社会の進展は、人間の精神に不安をもたらし、そこから「分身」のテーマが流行したということはいえるが、日本においては「分身」を享樂の対象とする谷崎の例や、「分身」を現実や日常からの解放として、規制の意味システムからの離脱とした梶井の例など、恐怖や不安の対象でなく、克服すべきものとされない「分身」の捉え方があったと鈴木は指摘している。

尾崎の「こほろぎ嬢」もいわゆる西洋的な「分身小説」の特徴には、単純に一致してはいないだろう。そこに一つの精神的危機や神経衰弱を見出すことは可能であるかもしれないが、

「しやあぶ／まкруおど」の関係は、自己を脅かす「分身」との対峙ではない。まкруおどは「詩人しやあぶの分心によつて作られた女詩人」であり、「分心」であればこそ、しやあぶの男性という身体的条件を無視することが可能になっている。この「分心」は「ありあむ・しやあぶの心が男のときはしやあぶのペンを取つてよき人まкруおどへの艶書をかき、詩人の心が一人の女となつたとき、まкруおどのペンを取つてよき人しやあぶへ艶書した」という非常に理想化された関係とされている。そしてさらに、その状態に恋をするこほろぎ嬢がいるのである。

このような「分心」の発想はどのように生みだされたのか。尾崎は「第七官界彷徨」の構図その他（『新興芸術研究』一九三一年六月号）において、自身の精神的関心は、フロイトに発していると述べている。尾崎は自身の理解は不完全であると留保しているが、ここではフロイトの分身論を参照して考察してみたい。

フロイトによれば、「ドッペルゲンガー」というモチーフは、はじめ「自我の没落に掛けられた保険」としてあり、自我の発展段階において、この「原初的なナルシズム」の段階が克服され、しかしまた今度は、発展段階において形成された自我の自己批判の機能によつて分離されたものがその表象に割りふられるようになる」と説明している。「ドッペルゲンガー」が、「不気味なもの」として感じられるのは、それが「克服された心の原始時代に形成されたものである——もっとも、当時はより友好的な意味をもっていたのだが——という事実由来」するから

らであり、そもそも「不気味なもの」のドイツ語が、その起源には実は「馴染みのもの」のことであったことにフロイトは注目している。そしてその「不気味なもの」とは「実際、何ら新しいものでも疎遠なものでもなく、心の生活には古くから馴染みのものであり、それが抑圧のプロセスを通して心の生活から疎外されていたにすぎない」のであるとされる。

しかしながら、自我―批判にとって嫌悪すべきそうした内容だけが、ドッペルゲンガーに併合されるわけではない。結局実現されずに終わりはしたが空想が依然として固執したがっている運命形成の可能性、また、外的な不都合のせいで貫徹されなかった自我―追求、そして、自由意志という錯覚を結果的に生み出す抑え込まれた意志決定、それらも同様にすべて、併合されるのである。

つまり「分身」とは、現実のいつつかの要因によって抑圧された自己の欲望や可能性が像として現前したものであるといえるのである。

「こほろぎ嬢」では、「しやあぶ／まころおど」の分裂状態は、異なる性質の「争闘」、克服すべきものではなく、「恋愛」として転換され、「分心」に理想的な自己の像が見られている。そこには現実の規定されて存在している自己以外の自己を生きる可能性があるからである。「分身」と「争闘」し、これを克服しなければならぬのは、統一されているべき「自己」が分裂していることは病であるという考えからくるものである。ここでは、その状態はむしろ肯定的に捉えられ、「分心」に今の自

分とは別のものになりうる期待が託されている。

こほろぎ嬢が、ここで示している「恋」というものは、この「しやあぶ／まころおど」という「分心」の状態への憧れであり、彼／彼女のようになりうることであるだろう。ここには、「分裂」したものに「同一化」しようとするという奇妙な構図があるが、しかし、「こほろぎ嬢」は「しやあぶ／まころおど」に到達することができない。「こほろぎ嬢」は図書館に通い、何冊もの文学史を繙くが、「ありあむ・しやあぶ氏は、図書館の建物の中で、何と影の薄い詩人」であり、「文学史の図体が大きければ大きいほど、その作者は、こほろぎ嬢が探し求めている詩人に、指一本染めてゐなかつた」のである。「しやあぶ／まころおど」の存在は「健康でない文学、神経病に罹つてゐる文学」として病に位置づけられ、「文学史」からは除外されている。「分裂」の希望は許されないものとして、こほろぎ嬢の前に閉ざされてしまっている。だがこのことは同時に、統一された理想像への安易な同一化の否定としても捉えることができるだろう。

前掲拙論に示したごとく、「少女小説」においては多くの理想的な「少女」のモデルが示され、読者たちはその「少女」に共感し、自らもそうあるべくその「少女」像に同一化していくことで、「少女」として「主体化」していったのである。少女たちの差異は、服装や髪型などの表層的なディテールとしてしか発現せず、現実にはさまざまな条件に規定されているはずの少女たちを、曖昧かつ感性的に統合していく。そうしてつく



られた「少女」という理想的イメージは、父権的なイデオロギ  
ーのなかにうまく回収され、一方では美しい「商品」のイメー  
ジにすり替えられ、「商品」の慰撫は「少女」たちの特殊な抑  
圧状況を覆い隠してしまうものとして機能するのである。

尾崎はこうした「少女小説」的限界に対して、「アツプルバ  
イの午後」「女人芸術」一九二九年八月）などにおいて、まず  
は「現実」と「イメージ」のズレを示していく方法を試み、ま  
た一方では「感傷」へと感情を統一していくことに奉仕する  
「もの」の象徴機能を攪乱することをやっている。

「こほろぎ嬢」において示される「しやあぶ／まくろおど」  
はまず「分心」として、主体の分裂の状態をあらわし、さらに、  
こほろぎ嬢にとっては目指されるひとつの理想的モデルであり  
ながらも、同一化することはできないものとして、「しやあぶ  
／まくろおど」とこほろぎ嬢とを分裂させたままにおくのであ  
る。このとき、こほろぎ嬢は詩人を追いかけようとする読者と  
してあるが、その期待は達成されない。そしてこほろぎ嬢を追  
いかけようとする「私たち」との同一化も拒まれていく。この  
ように、テクストはまず理想像を既に分裂したものとして提示  
し、さらにその憧憬の対象への同一化の欲望と同時に、その失  
敗を記して、すべてが分裂した状態を保ち続けているのである。  
しかもそのこほろぎ嬢の徒勞は、しやあぶの物語のなかであ  
らかじめ「心理医者」に並ぶ「冒瀆人種」として予言されてお  
り、その結果「哀愁」を感じるこほろぎ嬢の姿は、「感傷」を  
呼び起こすだけのものではなく、滑稽なものとして相対化され

ているといえるだろう。

### 3 もうひとつの「分身」

文学史に失望したこほろぎ嬢は図書館地下の食堂へ降りてい  
く。この食堂での出来事もまた「分裂」の問題を提示している。  
しかしこほろぎ嬢はここで理想的な自己像ではなく、別の「分  
身」、否定的な自己像の方に遭遇してしまうのである。

食堂でねじパン半本を喰べるあひだ、私たちは、こほろ  
ぎ嬢の心の色あいひついで言ふべき事もなかつた。嬢はた  
だパンに没頭してゐたのである。そして先刻以来文学史の  
序文によつてひどく打ちつけられてゐる事実をも忘れてゐ  
る様子であつた。

こほろぎ嬢は無心にパンを食べている。彼女は「肉体」を持  
つ者の営みに没頭してしまうのである。つい先ほどまでこほろ  
ぎ嬢が探し求めていたまくらうどについて「余等」が言った、  
「眼には涙を流しながら、口にはすでに新しい皿のご飯を食べ  
ている奴さ！」という台詞を無意識に実行するかのようなこの  
行為は、こほろぎ嬢の落胆を滑稽に相対化しつつも、同時にこ  
ほろぎ嬢の生きる現実を残酷に示している。

こほろぎ嬢は「霞を吸って人のいのちをつなぐ方法」を求め  
ており、ふいおな・まくらうどが「肉体」を備えない「分心」  
であることがその憧憬の大きな要因であったともいえる。自己  
を現実に規定してしまう「肉体」を放棄することを希求しなが  
ら、しかし、こほろぎ嬢は「肉体」に規定された現実にやはり

生きているのである。

そして、こほろぎ嬢の前に「産婆学の暗記者」が現れる。正確には、その人物はこほろぎ嬢が瞬間的に「疑ふところもなく、先方を産婆学の暗記者と信じてしまった」人物であるに過ぎず、実際はどのような人物であるか確かでない。しかし、そうであればなおさらこの「産婆学の暗記者」とは、こほろぎ嬢の無意識が反映された存在であるといえるだろう。末國善己はこの「産婆学の暗記者」もまた「分身」であると指摘している。

しかも、「産婆学の受験者」は、「こほろぎ嬢」によって「未」人とされる。夫を失って一人で生きなくてはならない女性と、「この世の中で知己に乏しく」「いろんな意味で儂い生きもの」とされ、女性一人で生きている可能性が高い「こほろぎ嬢」とは、どこか似かよった境遇である。

このような図式を考えにいれるならば、「産婆学の受験者」は、パンの世界を生きるもう一人の「こほろぎ嬢」といえるのではないか。産婆には、パンの不安がない反面、パンを手に入れるため自分の世界に閉じこもってばかりはいられない。自己の世界を守ろうとする「こほろぎ嬢」にとって、「産婆学の受験者」は、憧憬の対象であると同時に、敬遠すべき相手でもあるというアンビバレントな存在として目に映っている可能性が高いと思われる。パンと自己の世界に引き割かれた「こほろぎ嬢」にとって「産婆学の受験者」は「こほろぎ嬢」の一方の希望を鏡像として映し出す役割を果たしていたと考えられるのである。<sup>注10</sup>

「産婆学の暗記者」はこほろぎ嬢には反応を見せないが、こほろぎ嬢はこの「産婆学の暗記者」に「声は出さない会話」で話しかける。ここではじめてこほろぎ嬢自身の言葉が大量に本文に登場するのであるが、その語りかけには奇妙な特徴がある。「でも」の多用である。

：「御勉強なさい未亡人（この黒つばい瘦せた相手に向つてこほろぎ嬢はこの他の呼び方を知らなかった）この秋ごろには、あなたはもう一人の産婆さんになつていらつしやいますやうに。そして明けがたのこほろぎを踏んで、あなたの開業は毎朝繁盛しますやうに。こほろぎのことなんか発音したら、あなたはたぶん嗤はれるでせう。でも、私は、小さい声であなたに告白したいんです。私は、ねんじゆう、こほろぎなんかのことが気にかかりました。それ故、私は、年中何の役にもたたない事ばかり考へてしまひました。でも、こんな考へにだつて、やはり、パンは要るんです。それ故、私は、年中電報で阿母を驚かさなければなりません。手紙や端書は面映くくて面倒臭いんです。阿母は田舎に住んでゐます。未亡人、あなたにもお母さんがありますか。ああ、百年も生きて下さいますやうに。でも、未亡人、母親つて、いつの世にも、あまり好い役割ではないやうですわね。娘が頭の病気をすれば、阿母は何倍も心の病気に憑かれてしまふんです。おお、ふいおな・まくろおど！ あなたは、女詩人として生きてゐらした間に、科学者に向つて、一つの注文を出したいと思つたことはありません

せんか——霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法。私は年中それを願つてゐます。でも、あまり度々パン！パン！パン！ て騒ぎたかないんです」

この「でも」の連鎖は、こほろぎ嬢の抱える問題を次々に露呈させていく。まずは「産婆」という実用の学に対して、自分は「役に立たないこと」が気にかかるということ。そして金銭、母親に対する後ろめたさ。あるいは生殖、食べること。「肉体」の営みまで。しかもその「肉体」はあくまで女性という条件に拘束されてある。「産婆学の暗記者」を否定せずに、しかしあまりもそれと対照的な自己をも弁護しなければならぬこほろぎ嬢の狼狽が見て取れる。この人物が、こほろぎ嬢にとつて「産婆学の暗記者」でなければいけないのは、それがこほろぎ嬢が抑圧する要素の集合として導きだされた結果だからである。このとき、「産婆学の暗記者」とは、自己のなかにある理想的自己像としてではなく、抑圧した自己の「分身」としてこほろぎ嬢に回帰しているのである。つまり、これはフロイトのいう「抑圧されたものの回帰」であり、「不気味なもの」としての「分身」に相違ない。

そしてそれは「でも」という否定に導かれながら示されるのであって、直接にこほろぎ嬢に意識され得るものではない。ここで留意すべきは、こほろぎ嬢がこの否定的自己像ともやはり同一化するのではないということである。「産婆学の暗記者」としての可能性に対しても、こほろぎ嬢は「でも」と抵抗し続けているのである。

また「異国」の「詩人」の物語に代わって登場する「未亡人」や「産婆」といった存在は、「結婚」や「出産」というような「少女小説」の世界が排除していた要素を浮上させるものでもある。こほろぎ嬢が「パン」に没頭する頃には「私たち」は「こほろぎ嬢の心の色合ひについて言ふべき事もなかつた」と語り、「私たち」は「産婆学の暗記者」の登場とともに、急速に語りから退いていく。このとき「私たち」はもうこほろぎ嬢を追えなくなっている。「私たち」とこほろぎ嬢との共感関係は破綻しているといえるだろう。

#### 4 おわりに

こほろぎ嬢は、理想的自己にも到達せず、否定的自己にも抗いながら、「分裂」したままであり続ける。また一方で、こほろぎ嬢の「哀感」に共鳴しようとする「私たち」に同一化されることも拒んでいる。「分裂」したままであり続けることで、草臥れるしかないこほろぎ嬢には、尾崎の他の作品と比べると、「分裂」によつてもたらされるユーモアよりも、ネガティブさの方が強く刻印されているようにも思われるが、そこに生じる「哀感」が常に相対化されることで、テキストは感傷性への埋没を回避している。

また「少女小説」の拘束からの距離において、このテキストを読み返すとき、「分裂」とは、ただネガティブな病としてあるのではない。理想的な「少女」像に共感することで「少女」というアイデンティティを獲得していったかつての「少女小

説」的構図に対して、強い同一化の欲望を自覚しつつも「分裂」したままの「こほろぎ嬢」は、統一的な自己の獲得による安定とは誤認に過ぎないという、批評的な視座を有している。

このような「分裂」の方法によって、尾崎は「少女小説」的な感傷性の閉塞を乗り越えていったのだといえる。

もちろん、一方には、別のかたちで「少女」たちの悲しみは乗り越えられようともしていた。吉屋が「少女小説」のなかで提示していったような「主体的」に社会に抵抗する「強い」少女というあり方である。しかし理想像が変わったとしても、そのように提示された理想的イメージに呼応し、それに同一化するかたちでのアイデンティティの獲得の仕方では、「少女」たちに課せられた抑圧を解除することはやはり難しいだろう。そしてそれは容易に大きなイデオロギーに接続しかねない危うさを持っている。近づく戦時下において、女性たちの「主体的」な働きが、女性の社会進出を実現すると同時に「翼賛」の大きな力となってナシヨナリズムを推進させるものであったという皮肉は既に多く検証されている。<sup>注1)</sup>

そうしたとき、この「こほろぎ嬢」のような「分裂」的な存在は、決して実際の生活や社会的状況においてすぐに効力を発揮するものではないとしても、また別の可能性を持ち得るのではないだろうか。

こうした「少女」主体の否定は、「少女」たちの抵抗の拠り所を破壊し、彼女たちを再び孤独と不安に追いやるものであるかもしれない。しかし尾崎が示したのは、理想と現実、いくつ

もの矛盾する「分身」のあいだで揺れ続けるものが「わたし」なのであり、その不安を笑ってみせることである。それが閉塞した現状のなかで「商品」の慰撫に甘んじるしかない「少女」たちを悲しみの共同体から覚醒させ、違う抵抗のかたちを模索させるものであるのではないだろうか。

前掲拙論において挙げた二作品、少女小説「指輪」（少女世界）一九二六年（二月）と「アップルパイの午後」にも、「こほろぎ」が登場していた。はじめ、「こほろぎ」は少女たちの「悲しみ」を結ぶための象徴としてあった。そして次には、ロマンチックな月夜の効果を高める機能を解体して提示された。そして「こほろぎ嬢」においては、「私たち」の「淋しさ」を代表する仮名として召還されながらも、その同族の「哀感」を拒む存在としてあらわれる。「こほろぎ」はもはや淋しさを担うことをせずに、一つに意味づけることのできない「分裂」を抱えたものとなったのである。

## 注

- 1 小谷真理「翠幻想―尾崎翠のメタ恋愛小説」（『日本文学』一九九八年一月）、石原深予「尾崎翠の詩と病理―「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」を中心に」（『和漢語文研究』二〇〇七年一月）などを参照。その他、本論で言及するものについては本文及び注を参照されたい。

- 2 「尾崎翠と少女小説―吉屋信子との比較から―」（『学習

- 3 院大学大学院日本語日本文学」二〇〇八年四月）  
近藤裕子「匂いとしての〈わたし〉——尾崎翠の述語的世界——」（初出「日本近代文学」第五七集、一九九七年一〇月一五日、所収『臨床文学論』二〇〇三年二月、彩流社）
  - 4 既に高橋由香の論に、「この「私たち」は語る《私》と読む読者との統合的な存在ではないか」との指摘がある。高橋はここに「語り手《私》と読む《読者》とを、「私たち」として囲ってしまうことにより、「私たちのものがたり」を共に作っていくこととする、語り手の戦略」を見ている。（高橋由香「閉ざされた世界——こほろぎ嬢を中心に」、尾崎翠作品の諸相」専修大学大学院文学研究科・畑研究室、二〇〇〇年六月）
  - 5 森澤夕子「尾崎翠の両性具有への憧れ——ウィリアム・シャープからの影響を中心に——」（同志社国文学」第四八号、一九九八年三月二〇日）
  - 6 荒俣宏「フィオナ・マクラウドースコットランド神秘主義運動の象徴」（『幻想文学』二号、一九八二年一月）などを参照。荒俣は、この現象について、シャープが当時傾倒していたオカルティズムの影響による降霊術のようなものに拠るものと説明している。
  - 7 木村毅「個人内に於ける両性の争闘」（『新潮』一九二〇年一二月）
  - 8 鈴木貞美『モダン都市の表現』（一九九二年七月三一日、
  - 9 白地社）。またオットー・ランク『分身』（一九八八年一月、人文書院）、クレマン・ロセ『現実とその分身』（一九八九年一月、法政大学出版局）も参照。  
フロイト「不気味なもの」一九一九年、引用は『フロイト全集』一七卷（二〇〇六年一月八日、岩波書店）
  - 10 末國善己「異端・図書館・分身——尾崎翠『こほろぎ嬢』試論」（尾崎翠作品の諸相）専修大学大学院文学研究科・畑研究室、二〇〇〇年六月）
  - 11 鈴木裕子『フェミニズムと戦争——婦人運動家の戦争協力』（一九八六年八月一日、マルジュ社）、加納実紀代『私たちの〈銃後〉』（一九八七年一月三〇日、筑摩書房）などを参照。
- 本文引用は、『底本 尾崎翠全集』（一九九八年一〇月一五日、筑摩書房）に拠る。  
（たけだ・しほ 博士後期課程）